



宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校学校だより 第17号 (H22.8.3)

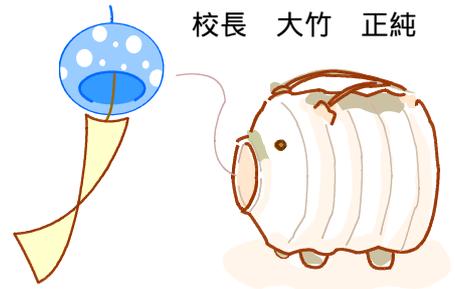
宮崎県都城市妻ヶ丘町27-15

TEL: 0986-23-0223 FAX: 0986-24-5884

校長 大竹 正純

しつ じつ ごう けん 質実剛健

「実力と気品をそなえ、たくましくあれ！」



今ある平和！「8月9日」

8月9日(月)は、原爆の日だということは、皆さん知っていると思いますが、まずは7日の「立秋」についてです。この日から立冬の前日までが「秋」です。秋は草木が紅(あか)く染まる季節と記されていますが、実際は1年で最も暑いころになります。一番暑いということは、その後は涼しくなるばかりとプラス思考で残りの夏休みを大切に過ごしましょう。暑中見舞いはこの前日まで、この日以降は残暑見舞いになります。夏休みも半分くらいが経過し、今からは8月25日から始まる学校生活のために、心と体の準備を少しずつ進めていきましょう。

8月9日は平和について考えるということです。65年前に長崎に原爆が落とされ、多くの人の命を奪いました。原爆が落とされたこの日に、平和について考えることは価値あることだと思います。今ある平和な社会は、多くの犠牲者の上に成り立っていることをよく理解し、私たち一人ひとりにできることは何か、お互いがどのように接していかなければならないのか、今の自分の生き方はこれでよいのかなど、考える機会になればと思います。

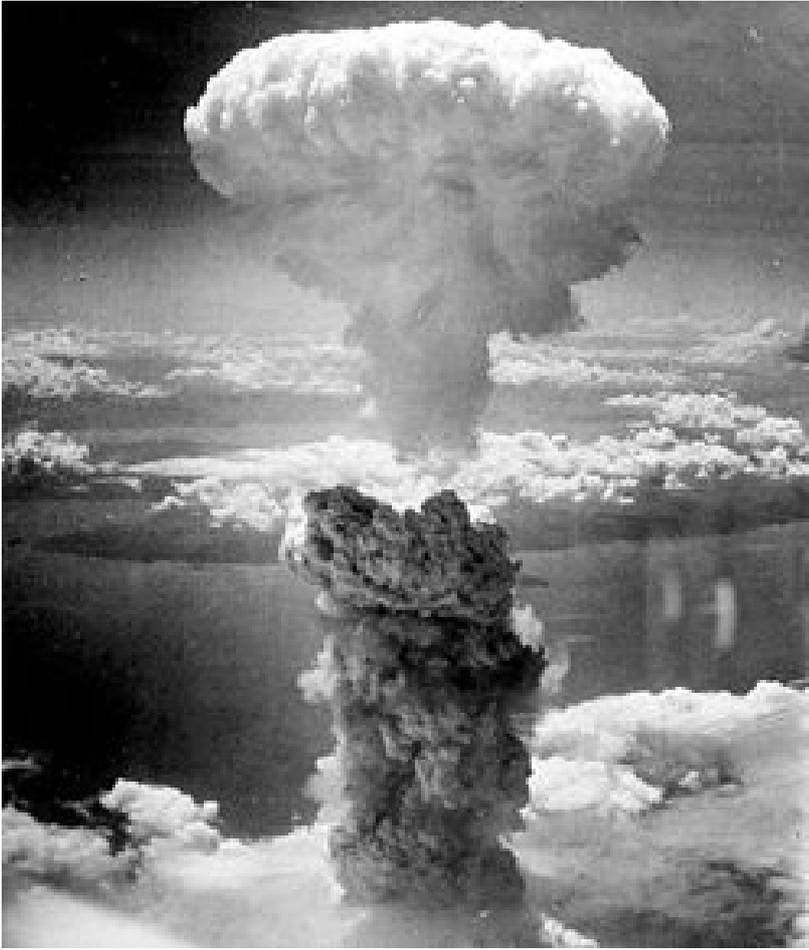
右の写真を見て、どう思いますか。この写真は、「焼き場に立つ少年」という題がついた一枚の写真です。この写真は、米国の写真家ジョー・オダネル氏が、原爆で焼け野原になった長崎で撮った有名な写真の一コマです。皆さんもご覧になったことがあると思います。

「すでに死んでいる幼子を背中にしよい、10歳くらいの少年が急ごしらえの焼き場で幼子を焼く順番を直立不動で待っている。白いマスクをした男たちがおもむろに近づき、ゆっくりとおんぶひもを解きはじめ、そして幼子の手と足を持ちゆっくりと葬るように、焼き場の熱い灰の上に横たえる。幼子が茶毘(だび)に付される様子を食い入るように見つめる少年の唇に血がにじんでいる。」

10歳くらいで見るその光景は、その少年にとってどうだったのかうまく表現できません。唇から血がにじむほどにきつくかみしめながらも最後まで見届けるその少年の強さに畏敬の念を抱くばかりです。

ジョー・オダネル氏はこう言われています。「そばに行つてなぐさめてやりたいと思ったが、それもできなかった。もし私がそうすれば、彼の苦痛と悲しみを必死でこらえている力をくずしてしまうだろう。私はなす術(すべ)もなく立ちつくしていた」と。そして、奇しくも2007年の8月9日の長崎原爆記念日に、ジョー・オダネル氏(85歳)は亡くなられたということです。





長崎市への原子爆弾投下

第二次世界大戦末期の、1945年8月9日、午前11時02分にアメリカ軍が日本の長崎県長崎市に投下した。これは実戦で使われた二発目の核兵器である。この一発の兵器により当時の長崎市の人口24万人のうち約7万4千人が死亡、建物の約36%が全焼または全半壊した。



広島市への原子爆弾投下

第二次世界大戦末期の、1945年8月6日、午前8時15分にアメリカ軍が日本の広島県広島市に投下した。これは実戦で使われた一発目の核兵器である。この一発の兵器により当時の長崎市の人口35万人のうち約14万人が死亡したとされる。



エノラ・ゲイ (Enola Gay)

エノラ・ゲイは、第二次世界大戦時に使用されたアメリカ陸軍航空隊、第509混成部隊、第393爆撃戦隊所属であるB-29爆撃機の中で原爆投下用の改造がされた15機の中の1機である。

1945年8月6日午前8時15分に広島市に原子爆弾リトルボーイを投下したことで知られる。



リトルボーイ (Little Boy)

リトルボーイは、第二次世界大戦においてアメリカ軍が広島市に投下した原子爆弾のコードネームである。

